

京丹後市袖志地区における水と暮らし

The use of water for living needs in Sodeshi district of Tango city in Kyoto prefecture.

三橋俊雄 田中靖子 河西立雄
Mitsuhashi Toshio Tanaka Yasuko Kawanishi Tatsuo
1) 京都府立大学 2) トランスコスモス株式会社 1) 京都府立大学

Abstract: This research clarifies the use of water for living needs in Sodeshi district of Tango city in Kyoto prefecture. Water resources are classified into 4 categories such as springwater, river, pond and water channel (narrow strips of water supplying rice fields) and their structure and functions related to daily life, subsistence and community were

examined. On that base some common standards or norms and designs for living were extracted. Finally the following interconnections were clarified 1) human wisdom to coexist with nature, 2) water as the base of subsistence, 3) water as the base of food culture, and community, 4) cultural landscape and 5) spatial concepts or axes related to water.

Keyword: springwater, river, pond and water channel, designs for living, coexist with nature

1. 背景・目的

かつて水場は生活していくために必要な飲み水、洗濯などの生活用水や農耕のための水を確保する場であり、ある時は物資を運ぶ交通網、またある時は漁撈の場、遊びの場にもなった。非常時の防災に使われることもあれば、日常生活を豊かにする水辺を作り出すこともある[1]。「飲料には早朝の澄み切った流れを汲み、洗ひ物にも次々の順序をきめて、下流に住む人の迷惑にならぬやうな、不文の約束が守られて居た。」[2]と柳田が述べるように、生活に不可欠な水は集団社会にルールをもたらし、それを共有することで社会的秩序が保たれていた[3]。今日、自然やコミュニティの崩壊が騒がれる中で、改めて水と人との生活を見直す必要があると考える。

本研究では、京都府京丹後市袖志地区を取り上げ、生活における水利用を明らかにすると共に、シミズ、カワ、イケ、イネと呼ばれる水資源を対象に、その役割・機能、空間的特徴・構成、意味としての場という側面から、それら水場の関係性を明らかにしていく。

2. 袖志地区の地理的概要

丹後半島の端に位置する経ヶ岬から西方向へ向かって初めに見えてくる集落が袖志である。旧丹後町で現在は京丹後市袖志地区になる。85 戸程の家々が並び、北側には日本海、南側には背後に山が聳えている。山側の段丘には水田があり、棚田が広がっている。集落は海、山の両面に挟まれるように東西に長い形が特徴的である。

3. フィールド調査

3.1. 袖志地区の小字と空間概念

集落を通る川は西から、寺川、西川、中川、夕知川、落川の5つからなる。落川橋の架かる旧道はちょうどこの集落の南北中央を通っており、それを軸とした南側（山側）をカミ、北側（海側）をシモと呼んでいる。また、5つある川のうち、寺川、西川、中川の3つがそれぞれの近隣に住まう者にとって生活に欠かせない役割を持ったもので、中でも最も川幅のあった中川を軸にした東側をヒガシ、西側をニシと呼んでいる。こうしたカミ、シモ、ニシ、ヒガシの概念が今も袖志の人々の中に息づいている。

3.2. 生業に関する水利用

袖志では現在も採藻業が営まれており、イワノリ、テングサを始めとし、年間において多様な海藻を採取している。中でも、イワノリは名産品として加工も行われる。その工程におい

も水は不可欠なものであり、ノリを洗ったり、ノリをすいたりする際に使われる。

3.3. 袖志地区における4つの水資源

これまでの調査で袖志地区において生活、生業と密着してきた水資源を4つ確認することができた（図1）。

①シミズ：山からの湧き水を「シミズ」と呼んでいる。小屋のような外観を持ち、主に飲料水として利用されていた。夏にはスイカやウリが浮かんでおり、夏は冷たく冬暖かい水として人々に親しまれた。長方形の水槽の端に隣接する形で仕切られた別の水槽があり、食器などを洗う方、すすぐ方と使い分けがされていた。

②カワ：袖志集落内に流れている5本の川のうち、中川、西川、寺川は主に生活用水として利用されてきた。中川では大きく分けて4箇所の洗い場があり、上流、下流の使い分けがされている。水道ができる以前はカワの上流部分を飲み水としても利用していた。飲み水、米を炊くための水、海藻を洗う水、野菜を洗う水、続いて洗濯水、最も海に近い下流ではおしめ等汚れた衣類を洗う水というように上流から下流に向かって用途によるヒエラルキーが存在していた（図2）。

③イケ：カワから少し離れた家に住む人々が共同で利用するためにつくられた溜池である。ただし、カワでの用途を全て賄っていた訳ではなく、イケと近い位置であったとしても、風呂を沸かす水としては利用するが、洗濯はカワまでしに行っていたことがあるように、カワの機能を補うものであったと考えられる。イケは山にある水脈を掘り当てて引いてきたもの、また川から引き込んできたものがあつた。イケの水は生活用水として飲み水、炊事、洗い物、洗濯、風呂水に使った他、非常時には防火用水としても利用されていた。

④イネ：袖志地区では山に棚田が広がり、各棚田へ繋がる農業水路をイネと呼んでいる。イネは川と各家の所有する棚田を結んだ水路システムである。各家の持つ棚田の面積に伴って共同で出資し、それによって水利権を得る仕組みになっている。「イネそろえ」と言って、共同で自分の所属しているイネの草刈をしたり、崩れを直したりしている。中でも最も長いイネ、袖志と西隣の尾和集落を繋ぐ尾和イネがある。袖志から流れてきた尾和イネの水は尾和の人々が稲作りに使う農業用水として利用されていた。一方で、袖志が干ばつによる水不足においても米が栽培できるように、普段尾和まで流れる水を途中で

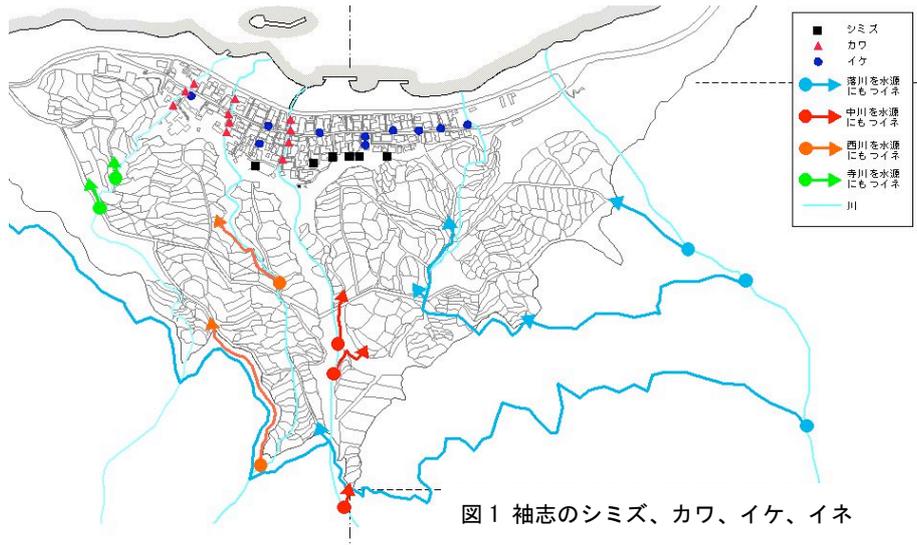


図1 袖志のシミズ、カワ、イケ、イネ

20 数箇所ある取水口から落とし、袖志の棚田に水を供給していた。また、尾和イネは急な火災のときには防火用水としても利用された。尾和イネと中川、西川との立体交差点にある取水口から川に水を落とし、それをせき止めてポンプで水を汲み上げて消火したのである。農業水路としてのイネがそれだけの機能ではなく、干ばつ時や災害時の救援機能も果たしていたことが明らかになった。

4. まとめ

京丹後市袖志地区調査による、シミズ、カワ、イケ、イネの4つの水資源のあり方から、暮らしを支えた水システムの評価軸について以下の6つを抽出した。

1) 自然と共生する水利用の技

袖志には古くから5本の川が流れていたが、人々はカワの他に人工物であるイケやシミズを作った。それらは川や山にある水脈から水を引いてくることで、より便利に水を供給できるシステムを作り出した。また全ての棚田に水が行き届くようにゆるやかな勾配を考慮してつくられた農業水路であるイネを生み出した。与えられた自然環境の中で、それらを最大限に利用しつつ、生活に役立つように手を加えてきた。

2) 生業を支えた水

袖志の海女に代々受け継がれてきた採藻業は古くからの生業であった。採って来た海藻は、テングサにしてもイワノリにしても真水で洗う。イワノリはそれを洗う工程から海苔として製造する工程に渡って、大量の真水が必要となる。こうして生業である採藻業も袖志の水の利用と共に発展したといえる。

3) 食文化を支えた水

現在は豆腐づくりも酒造も見ることができないが、これらには良質の水が不可欠であった。かつて西川の近くにあった豆腐屋

では湧き水であるシミズではなく、西川の水を利用していたという。西川は集落内にある5本のカワの中でも、「病気の時には西川の水が良い」とされていたほど、人々に評価された水質の高い川であったことが知られている。

4) コモンズを支えた水

棚田に張り巡らされたイネを共同で管理したり、カワの水に関しても、洗うものによって使う水場の序列が決まっている。そのようにコミュニティで守るべきルールが浸透しており、またそれを守ることで共同意識「コモンズ」を育ててきた。イネの管理においても共同で掃除を行い、またそれを定期的に行うことを定めている。このようにさまざまな共同体的行為によって生まれた制度、つまりコモンズが、現在の袖志においてもコミュニティのルールや行事として活かされている。

5) 文化的景観

現在の中川は舗装整備によってその姿を変えてしまい、また旧道沿いにあったイケも見られなくなっている。現在では西川のみが風情ある景観を残し、袖志における水場の原風景を醸し出している。往時において、まさにシミズ、カワ、イケ、イネの水場は人々のアメニティー空間であり、文化的景観として機能していたことがうかがえる。

6) 水とのかかわりを軸とした空間概念

袖志では、旧道を軸としたカミ、シモ、中川を軸としたニシ、ヒガシという空間概念が人々の心の中に息づいてきた。袖志は室町時代、20 数軒の家が中川周辺に点在していたと言われている。その中川を中心として集落は拡大し、ニシ、ヒガシの概念が生まれたようである。一方、カミ、シモという概念は空間を指すのみでなく、「シモの水は使わない」、「上田（カンダ）にはシミズが湧く」というように水の利用と深く関わってきた。このように袖志では、水を中心とした空間概念が人々に共有され、現在まで使われている。

以上示した暮らしを支えてきた水に対する評価の視点は、今日標榜されている自然共生型社会のあり方を指向する上において、貴重な示唆を含むものと考えられる。

注／参考文献

- [1]鳥越 皓之、里川の可能性—利水・治水・守水を共有する、新曜社、11-12、2006、
- [2]柳田国男、柳田国男集第二十一巻、429、
- [3]渡部一二、水路の造形美—水の恵みをうける日本の原風景を求めて、東海大学出版会、188、2006

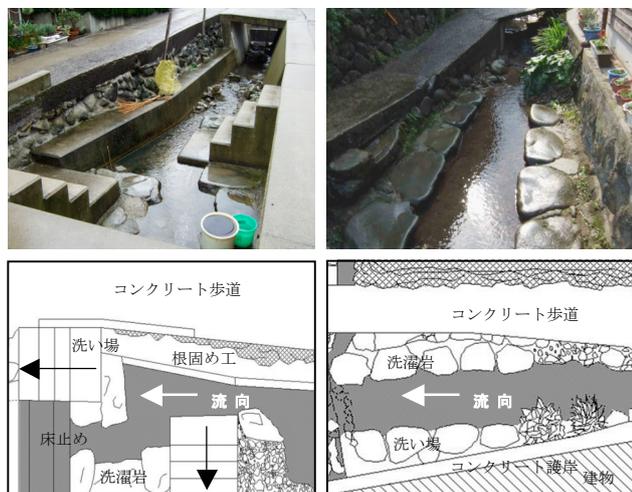


図2 カワの水場写真と実測図